

（博士論文公表用表紙）



北海道公立大学法人
札幌医科大学
 Sapporo Medical University

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	Development of model patterns for coping with depression and influences of patients with depression and family members from the viewpoint of the family system 家族システムの観点からみたうつ病が患者とその家族にもたらす影響とその対処パターンモデル構築に関する研究
Author(s) 著者	Yuka Harada 原田由香
Degree number 学位記番号	第7号
Degree name 学位の種類	博士（看護学）
Issue Date 学位取得年月日	平成30年3月31日
Original Article 原著論文	「うつ病患者の家族への支援に関する文献的研究」原田由香, 吉野淳一（家族療法研究34（2）, 200-208, 2017） 「うつ病が患者の家族にもたらす影響ととその対処について - うつ病を有する子どもをもつ親の語りから - 」原田由香, 吉野淳一, 澤田いずみ（札幌保健科学雑誌7号, 11-17, 2018）
Doc URL	
DOI	
Resource Version	

- （注）1 ※欄は、学務課又は附属総合情報センターで記入するので、記入しないこと。
 2 本様式は、博士論文の全文又は要約による公表のほか、本学が行う論文の内容の要旨及び審査の結果の要旨の公表を行う場合に使用するものとし、必要に応じて記載内容を編集して使用する場合があります。
 3 本様式を提出後に、記載内容について変更が生じた場合は、変更後の本様式（電子データを含む。）を学務課に提出すること。

博士論文の要約

報 告 番 号	甲第 1412 号	氏 名	原田 由香
<p>論文題名</p> <p>家族システムの観点からみたうつ病が患者とその家族にもたらす影響とその対処パターンのモデル構築に関する研究</p> <p>Development of model patterns for coping with depression and influences of patients with depression and family members from the viewpoint of the family system</p> <p>【研究目的】</p> <p>本研究は、うつ病が家族というシステムにどのような影響をもたらしているのか、またうつ病によってもたらされた影響にシステムとしての家族は、どのように対処しているのかについて明らかにすることにより、うつ病に対する家族システムの対処パターンをモデルとして提示することである。</p> <p>【研究方法】</p> <p>対象者は医師からうつ病と診断または説明を受けている家族成員とお互いに家族と認識しあう間柄で、続柄が 親、配偶者、きょうだい、子どものいずれかに該当する 20 歳～ 74 歳の家族成員 20 名である。方法は 1 人につき 1 回 60～90 分程度の半構造化面接を実施し、IC レコーダーに録音したものをデータとし、分析には木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。なお、倫理的配慮として、札幌医科大学学長の承認を得て実施しており、研究協力施設と対象者の同意を書面で得た。開示すべき利益相反はない。</p> <p>【研究結果】</p> <p>うつ病が家族システムにもたらした影響として、親の語りから 18 概念が生成され、『家族成員間における不可避 な不協和音 と不変的な繋がり』、『紆余曲折を経て再発を心配する中でも試みられる肯定的な捉え』など 3 カテゴリー、配偶者の語りからは 18 概念が生成され、『うつ病によって家族成員間に生じる ぎくしゃくとした時間 と絆の深まり』、『うつ病に 生活のベースもペースも持っていられる 』など4 カテゴリーが抽出された。きょうだいの語りからは 15 概念が生成され『家族成員の 複雑な 心情をおもんばかる』など3 カテゴリー、子どもの語りからは 12 概念が生成され、『担う役割によって経験された対極的な立場』などの4 カテゴリーが抽出された。</p> <p>うつ病への家族システムとしての対処については、親の語りからは 16 概念が生成さ</p>			

れ、『うつ病を有する子どもと程 良い 距離を保つ』などの4カテゴリーが抽出された。配偶者の語りからは 17 概念が生成され、『うつを受け止めながら飲み込まれないように対応する』など5カテゴリーが抽出された。きょうだいの語りからは 12 概念が生成され、『うつ病 を有するきょうだい を適度に病人扱いしない』など4カテゴリー、子どもの語りからは 11 概念が抽出され、『大切なことは家族内で納めながらも地域社会と わずかに繋がり続ける』など4カテゴリーが抽出された。

対処パターンについては、対象者 20 名から抽出された 17 カテゴリー、56 概念をそれらの関係性に着目してパターンを想定して配置した。その結果、対処の方向性として、家族成員のひとりがうつ病に対処するための主な窓口となる [一極集中] 、 家族成員が個々に食事面のサポート、安否確認、愚痴を聞くといった役割を担う [分散] 、 他の家族成員がうつ病を有する家族成員の役割機能を代替する [代替]、うつ病になったことを特別視せず従来の生活を続け、サポート感を強調しない [寛容] の4方向性が見出された。

【考察】

本研究で得られた新たな知見として以下の3点が挙げられる。第一にうつ病は家族成員間の関係に必ずしもネガティブな影響をもたらすわけではなく、関係性の好転や絆を深めるといったプラスの影響ももたらしていた。第二にうつ病を有する家族成員に対し同情や自責感、肯定的な感情など複雑な心情を抱えながらも、うつ病に対する認識や捉え方、受け止め方を変化させ、最終的には家族成員のうつ病体験を肯定的なものとして捉えようとしていた。

第三にうつ病への家族システムとしての対処として [一極集中]、[分散]、[代替]、[寛容] という4方向性が見出された。これらの方向性を本研究の対象者は、上位システムである地域社会との繋がりを保持しながら、《一極集中分散型》対処パターンや、《一極集中寛容型》対処パターンなどのように複数組み合わせてうつ病に対処していたと考えられ、それらをモデルとして提示した。

キーワード：

うつ病，家族，家族システム，影響，対処パターン